

日達上人迄は正しく血脈は流
れていたが、日顕上人（本名
阿部信雄）で血脈は断絶した。

廣田 頼道

誰が言い出したのか、右の題名のような発言をし、日達上人迄の御本尊は拜んで良いが、日顕上人の御本尊は拜んではいけないという理由付けになった。

日達上人が阿部信雄師に相承を与える事が出来ず、阿部信雄師は受けたと主張し、「私が受けていないというなら、受けたという者、出て見ろ。日達上人が相承をしないで亡くなったら日蓮大聖人の仏法が断絶したということになってしまふ。そういうことを言う者は、日達上人を貶める者である。」

という趣旨の、まるで小泉純一郎の屁理屈、国会答弁の様な事を言つて、阿部師自身は今日迄の25年間、堂々とやって来たつもりでいるのだが、胡散臭いものは、何年たつても風格も実績もつかず、胡散臭いだけなのであります。

日達上人迄は正しく血脈が流れていたのだろうか？

○法門に關係なく、第六十三世日満上人は山内の杉を伐採し、売却した事により退座を余儀無くされる。

○第六十世日開上人は、法門に關係なく文部省の指導のもと、派閥鬭争、中傷合戦の挙句に行なわれた管長選挙によつて選ばれし管長である。

○法門に關係なく、第五十八世日柱上人は宗門改革を打ち出しても、改革反対の人間が多く退座を余儀無くされ、相承を渡すこと迄拒むも、最終的には無派閥、学匠の日亨上人に相承する。

○当山念珠の御相伝三通之レ有り、目師御筆、道師御目錄之レ有り、然る処に十八代日精上人御代之レを失ふと見へたり日舜（十九世）上人精師在府の砌、仰^セ越され候へば長持の中に之^レ有るべき由仰^セ候へども之^レ無しと見へたり、たとえ之^レ有るも日典（二十世）上人御代三^三大坊焼失（富士年表未記入）の砌、焼け失せたる者か、故に今御目錄十七条のみ之^レ有り御相伝悉皆失ふ故、日忍（二十一世）上人日俊（二十二世）上人已来数珠相伝に当山の相伝之^レを失ふ故に要法寺日大（要法寺六世）上人叡山相伝之^レ有り、喜^{ハシ}い哉、悲^シ哉、大衆方正法を守ると云へ

ども近代上人方は皆正法を失ひ天台真言の邪義に附する故に今日因（三十一世）之を改め近代上人方の附邪の法を疑ふのみ、

「袈裟数珠の事」日因上人（宗学要宗一卷377P）

近代上人方とは、十五世日昌上人、十六世日就上人、十七世日精上人、十八世日盈上人、十九世日舜上人、二十世日典上人、二十一世日忍上人、二十二世日俊上人、二十三世日啓上人の九代に及ぶ要法寺からの貫主を指す。袈裟数珠に關わる相伝だけが焼失したのではない事は、説明せずとも御理解頂けると思う。

○第十七世日精上人は「造仏誂誦」（宗学要宗九卷69P）の貫主。

○日目上人よりの相承判然とせず、第四世日道上人と日郷が長く論争となる。

この他にも幼少貫主（十才、十二才）相承や、相承を他人に預つてもらつて後で受けるといふような曲芸の様な歴史も、大石寺の資料に裏付けされて明らかであります。

こうして考えてくると、何を根拠にして第六十六世日達上人迄は血脈は正常に流れて来ていたと言え

るのでしょうか。私は言えません。

昭和五十二年の頃、大石寺は創価学会と、どの様
にやつて行くのかということが教区でも議論されて
いました。まだ、正信会など出来ていない、「活動
家僧侶」と創価学会に対して強硬派と言われている
人達が称せられていた時代であります。

「大石寺の一器の水を一器に、金口嫡々、無謬の相
伝にも歴史上色んな問題があるんじゃないんですか。
自分達だけ絶対正しくて、創価学会だけ間違つてる
ということとは通らないと思いますよ。」と、私が発
言した所、支院長が

「歴史の中でそつと蓋をして、墓場へ持つていかな
くちゃあいけないんだ。問題にした所で、どうい
う解決の方法があるというんだ。」

と言われた。私は、もう駄目だと思つた。

無いのに有ると信じる。有ると思う。有ると人に
伝える。有ると思わなければ謗法。有ると信じな
ければ成仏出来ず。有ると考える人々が世界中に拡大
して広宣流布。

これが現代の日蓮正宗だということを、支院長の
自嘲を帯びた力無い言葉に、衝撃を覚えた。現在の

大石寺が陥っている血脈観からすれば、日達上人に
も血脈は流れていない。そして日達上人書写の本尊
も拝むに値しない事は、日顕上人と大差ないとい
う事になつてしまふのであります。

顕正会の血脈観

顕正会も、国立戒壇を日蓮大聖人の法門の全てと
偏執している為、妙信講設立認可当時の貫主、日淳
上人迄は正しい血脈が流れていたと主張し、過去の
宗門史には眼を向けず、ひたすら頑迷に信じ、触れ
ようともしない。しかし近年の日達上人、日顕上人
は国立戒壇否定の主謀者である為、日達は日顕に
相承する事も出来ず、無残な最後、だつたと断定して
いる。しかしここで不思議に思えるのは、相承が公
式にあれば、それは認めるといふ姿勢が垣間見られ
ることである。つまり顕正会も金口嫡々、一器の水
を一器に、無謬の相伝を大石寺の相伝と主張してい
るといふことになる。ならば日達上人が日顕上人に
相承出来なかつたその相承は、今現在どうなつてい
ると説明するのだろうか。「顕正新聞」には掲載さ
れていない。

創価学会の血脈観

創価学会は、広宣流布に邁進する自分達の所に血脈が流れていると主張する。自分達の所と言うわりには、池田先生の所から会員へ、師弟の契りに叶えばという条件付きで、裏切るなよ、裏切るなよ、裏切つたら地獄へ堕ちて幾度生れ変つても塗炭の苦しみから逃れられないぞ、法華経の行者を裏切る罪は重いと脅迫と怨念の金縛にかけている血脈観で、法門的には一考の余地も無い。

日興跡条々の事の分半座を主張する人々の血脈観はどうだろう。日目上人の所へ貯っているのだろうか、どうしたら流れ、どうしたら止るのだろうか、日目上人の所に心を浮べて信心をするというが、日目上人のどういう所なのだろうか。

正信会の血脈観

私も含めて正信会の大半を占める僧俗は、正信会を形成する以前に、大石寺の貫主本仏、血脈絶対無謬、戒壇本尊絶対の思想を徹底して教育され育つて来た者達であります。しかし、創価学会の池田本仏

化、御本尊模刻問題に直面して、これは日蓮大聖人の法門から外れるものであると判断し、それを容認する貫主も、法門から外れる貫主も現実にいると日頭上人の地位不存を裁判に訴え、小僧の時から教え加えて、この原稿の冒頭に列挙した歴史上の事実を「継命新聞」において示し、日頭上人の主張する、大石寺の血脈観がいかに幼稚なものかを検証したのであります。しかし、不思議な事に正信会の中には、

A. 日頭上人が反省するか、違う英邁な人格を持つた貫主が現われれば、元の様に大石寺へ帰って、元の様に金口嫡々でやっていけると考える人達。

B. 日頭上人を批判する為に過去の歴史的事実を暴き過ぎると、坊主の権威が損なわれるので、ほどほどにしなければいけない。正信会の道を選んだ人間は以前から正しかった。選ばなかった人間は謗法ということやっていきたいという人達。

C. 今迄の大石寺の血脈観を否定したのだから、新しく日蓮正宗本来の血脈とは何なのかを研鑽し示さなければいけない。

大雑把に、この三種類の考え方に分裂してしまっ

ているのであります。

Aは、正信覚醒運動の目的は本山へ帰る事である。本来自分達は大石寺から仏法を救ったことで、感謝されて然るべきであり、批難される筋合いのものではない。能化にしてみらうか、二階級特進で優遇される立場である。教義解釈、法門はそのままに、古い時代の事や小僧の時に聞いた事がない様なことは議論をしないで、いつでも戻る事が出来るように、宗教法人を取得するなどんでもない事だ。

Bは、情況の流れ次第で有利だったらどつちでも良いですよ。でも団体交渉権だけは強く有利に持つていなければいけないので、規律正しく皆んな全体主義でいきましょう。

Cは、今迄自分達が教えてこられた本尊観、血脈観、広宣流布観、折伏観等々は全て問題があるので、全部洗い出して、正信覚醒運動が起った時の、本当の日蓮大聖人の法門を見出そうという考えを堅持しなければいけない。

このABCが信心、修行、研鑽によつて流動化し、将来融合して行くのかどうかは分かりませんが、今現在、こういう状態になっているのは事実なのであり

ます。

二十五年余り、正信覚醒運動に関わつて来て、日達上人から日顕上人への相承の有無を、

「御相承箱を見せてくれたら、もしかして、御相承があつたかも知れないぐらいに思うかも知れません。」という箱に入る血脈観を持つているようでは、もうこのA、B、Cは固定化し、融合の余地のない硬直した状態に達してしまつていのかという悲観的な見方も出来ます。

私自身は、正信会は、大石寺が抱き締めて来た血脈観を歴史資料を基に末端微塵に否定して来たのだから、本当の血脈とは、末法萬年、尽未来際は一切衆生の成仏に達する血脈とは何なのか、日蓮大聖人のいわんとしていた血脈とはなんなのか。それを研鑽し議論し会通出来る、一切衆生が納得せざるを得ない様な法門を何故示そうとしないのか。ボロ切れの様になつていることが分つている代々の貫主の系譜を、昔と同じ様に黙つて信者さんに信じさせ、御供養で生活し、自分の短い人生の間だけ波風が立たず、少しの富貴が得られれば後は知らない、詐欺の様な愚行を続けようとするのか、A、Bが理解出

来ないのであります。どんなに歴史的事実を焼き尽くしても事実は変らない。ならばこの事実を踏まえた真実の法門、事実法門が必要なのであります。その事に寄与することが、今迄大石寺が抱き締めて来た間違つた血脈を木端微塵に否定して来た、正信会の責任だと思ふのであります。正信会も日達上人の所迄流れているというならば、その後は貯っているのか、どうして流れるのか、どうして止るのか、はっきりさせなくてはいけない。

真実の血脈の必要十分条件

私自身がこれがおかしい、あれがおかしいと指摘するだけで終つてしまえば、同じ穴のムジナで、何の議論の進歩もありませんので、今迄自分が考えて来た、真実の血脈に必要なして十分な条件を満たしている内容とはどういうものなのかという基準を示し、多くの人に、それぞれ当事者として考えてもらいたいと思ふのであります。

釈尊と上行菩薩の間には付属がありますが、上行菩薩と日蓮大聖人との間には、日蓮大聖人の

「多宝塔中にして二仏並坐の時・上行菩薩に譲り給

いし題目の五字を日蓮粗ひろめ申すなり、此れ即ち上行菩薩の御使いか」四条金吾殿御返事（全1117P）と自ら上行菩薩の再誕であることを、法華経の内容に添つて、それに叶っている者は日蓮しかいないという情況を証拠として明示しているのであります。

『三国四師』も、釈尊、天台、伝教、日蓮の間には直接的な付属・相承はありません。しかし、日蓮大聖人は、

「天台大師は釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す」等云々、安州の日蓮は恐くは三師に相承し法華宗を助けて末法に流通す三に一を加えて三国四師と号く」 顕仏未来記（全509P）

この様に、法華経弘通という一貫した共通項を示し『相承』と表現しているのであります。千年、二千年の時間と国、言葉という空間を超越しても、同じ依経を信じ法華経の内容に合致した生き方、使命、責任によつて相承と考えることには何の不思議もなく、当然の事と思ふのであります。実際の物証的相承があり乍、伝教、義真、円仁と教義が変節して行くものよりは、内容的整合性の合致を相承と考える

事は、根本が信仰であるだけに一番根源となる事だ
と思うのであります。

では、日蓮大聖人は、血脈の本質、本源を何と規定されていたのでしょうか。釈尊からも、上行菩薩からも、物的証拠の相承のない日蓮大聖人は、立教開宗の建長五年四月二十八日を境にして、自ら蓮長の名前を捨て、日蓮と改名します。そのことを

「日蓮は日本第一の法華經の行者なりすでに勸持品の二十行の偈の文は日本国の中には日蓮一人よめり
(中略)」

「日蓮となのる事自解仏乗とも云いつべし」

寂日房御書(全903P)

と示され、

「大法東漸してより僧史に載する所、詎に幾人か曾て講を聴かずして自ら仏乗を解する者あらん乎」

法華玄義卷一

に示される『自解仏乗』。自ら一切衆生を悉く成仏させる教えを悟ったとの実感を得たのであります。

この寂日房御書の後に

「かやうに申せば利口げに聞えたけれども道理の能すところさもやあらん、經に云く「日月の光明の能

く諸の幽冥を除くが如く斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅す」と此の文の心よくよく案じさせ給へ、斯人行世間の五の文字は上行菩薩末法の始の五百年に出現して南無妙法蓮華經の五字の光明をさしいだして無明煩惱の闇をてらすべしと云う事なり、日蓮は此の上行菩薩の御使いとして日本国の一切衆生に法華經をうけたもてと勧めしは是なり」

と示し、日蓮と名乗る道理の裏付けは、神力品の「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く斯の人間に行じて能く衆生の闇を滅す」である。日蓮の日は、東天より昇り天下を照す太陽。その太陽の光の本質は南無妙法蓮華經であるから、その『蓮』そして日蓮を名乗る者は上行菩薩の使いとして世間に行じて能く衆生の闇を滅する者であり、かつ、勸持品二十行の偈の釈尊に対して、仏の滅後において、南無妙法蓮華經の法を信じ修行し折伏弘通する者に悪口罵詈、刀、杖を加えられ、生命に及ぶ困難が競い起つて来ると言われるけれども、必ず忍んで南無妙法蓮華經の法を説いて行くことを誓います。

と、まさしく常不輕菩薩の生き方を示す内容を満す為に、自分は『日蓮』と名乗る。自解仏乗の内容は

これだと示すのであります。

『日蓮』と名乗った内容は当然の如く、生涯『法華経の行者日蓮』の名称に集約され貫かれます。佐渡流罪の際に立ち寄った寺泊で、

「法華経は三世の説法の儀式なり、過去の不軽品は今の勸持品、今の勸持品は過去の不軽品なり、今の勸持品は未来の不軽品為る可し、其の時は日蓮は即ち不軽菩薩為るべし」 寺泊御書（全953P）

と述べられている。つまり三段論法を使って、日蓮

未来	現在	過去
	勸持品 ← 不軽品 ①	
	勸持品 → 不軽品 ②	
不軽品 ← 勸持品 ③		

は不軽品にも勸持品にも叶う生き方をして来た。成仏を遂げようとするならば、未来、末法万年の衆生も日蓮と同じ心で、同じ法華経の行者として法華経を弘めなければいけない。法華経の行者の中味、内容は、日蓮も一切衆生も成仏する為には同じだということを示しているのであります。しかし、末法万年、未来の衆

生の生き方は不軽品に全てが表されていると断言しているのであります。又、佐渡流罪中の開目抄にも「されば日蓮が法華経の智解は天台伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたる事は、をそれをもいだきぬべし、（中略）法華経の第五の巻勸持品の二十行の偈は日蓮だにも此の国に生れずば、ほとをど世尊は大妄語の人、八十万億那由佗の菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ちぬべし（中略）日蓮法華経のゆへに度々流されずば数々の二字いかんがせん、此の二字は天台伝教もいまだよみ給はず況や余人をや、末法の始のしるし恐怖悪世中の金言のあふゆへに但日蓮一人これをよめり」

開目抄（全202P）

と示し、「難を忍び慈悲のすぐれたる事」の、南無妙法蓮華経を不軽品、勸持品の言葉通りに実行する。その目的は一切衆生成仏の為であるという慈悲。それは末法という時を迎へなければ出来ないことなのであると表わしているのであります。

末法という時節を重要と説いているのは、日蓮大聖人だけではありません。

平安時代、鎌倉時代の開祖、宗祖といわれる者は、

全て釈尊の説く末法思想によつて、釈尊の教えが有効でなくなるというのなら、それに変わる宗教を見出さなければいけないと、それぞれが正しいと思う経文を掴んで、これが一番と主張したのであります。

平安中期より始つたとされる比叡山の千日回峰行も、末法という時代を見据えたものであり、その行の根源は常不輕菩薩の二十四文字の行体によるといわれています。もつとも今日では、行明けになると生き仏の阿闍梨様といわれ、元来の意味から外れ、見せ物のイベントの様になっているのは、天台宗の中で宗教のごつた煮の様になっている事が原因と思われる。しかしこのごつた煮も、末法をどう乗切るかと考えた末の、迷走として行きついた迷路なのであらう。

「天台回峰行の開祖相応が円仁から不動明王法と別尊儀軌護摩法を授けられ上、さらに山中深く幽寂の地を求め歩き、ある夜、叡南岳において薬師如来から、

吾が山は三部諸尊の峰なり、此の峰を巡礼し、山王の諸祠を詣でて毎日遊行の苦行をせよ、これ不輕菩薩の行なり、誦誦經典のみ寺にせず、ただ

礼拝を行ずるは事に即して真なる法なり、行満せば不動明王本尊となり一切の災殃を除くべし

との示現をこうむり、ここから相応による叡南無動寺谷とその回峰修行業の歴史がはじまるのである。」

「比叡山と高野山」 景山春樹 著

末法を迎えたら天地がひっくりかえり、権力者もその座からすべり落ち、下剋上の世の中になる。平安末期の世の中の人々が全てそう考えていたのであります。

1910年（明治43年）ハレー彗星が地球に接近した時には、空気がなくなるといわれ、自転車のチューブが酸素ボンベなどない時代だった為に、大量に売れたそうであります。又、世界中の人が死んでしまうなら先に死のうと、自殺者が多数にのぼり、御金を持つっていても仕方ないと、大散財をする者もいたといひます。

まさしく精神的不安と混乱は、ハレー彗星以上のものが1052年（永承七年、平安中期）（天台大師の説により周の穆王53年を釈尊入滅年として、紀元前949壬申二月十五日を取る）末法に突入したといわれる時代にはあつたと思ひます。

正法時代千年、像法時代千年の釈尊入滅後二千年が過ぎると、末法万年に入ると釈尊は説きました。

『正』とは、釈尊の在世感覺をそのまま引きずり、釈尊を直に認識している人々も沢山いた時代であった為に、釈尊はこうだった、釈尊の教えはこうだったという感覺を抱いて、あたかも生きている様に千年間過すことが出来るという意味で、正法時代の『正』というのであります。

『像』は映像の像、影という意味で、誰も本物の釈尊を見た人間はいませんから、聞き伝え、言い伝えのイメージで、釈尊という人は立派な人だった。立派な教えを説いたという、その心象に膨らむもので千年間過すことが出来るという意味で、像法時代の『像』というのであります。

『末』は、まったく『正』と『像』の感覺がまったく無い時代。釈尊という仏がいたことも、釈尊が説いた教えがどういものなのかさえも疑い信じない、正、像の釈尊の残影が粉碎され、磨滅して粉々に微粉末になった状態を『末』と表現しているのであります。

「嘉禅法華義疏五」には

佛雖去_レ世法儀未_レ改。謂_二正法時_一。
佛去_レ世久。道化訛替。謂_二像法時_一。
轉復微末。謂_二末法時_一。

「三大部輔注七」には

正者證也。像者似也。末者微也。
と、示されています。

譬えて言うると、正法時代に夕テ、ヨコ、高さ100mの御影石の真四角な石があったとします。人々は不思議な存在だと思い、神が作ったか、仏が作ったか、人間技ではないと世界中から見物に来るように話題になります。この巨大な石が千年の風化を経て、角も丸くなり、まんじゅうの様な50メートル四方の原形から半分の大きさになったとします。しかし50メートル四方でも自然界の中ではめずらしい物体ですから、世界中から見物に来て、この石は元々は一辺100メートルの立方体だったものです。と説明すると、全員がホー。へー。と言って50メートル四方でもすごいのに、この二倍あったのかと想像力を膨らませて感心するのであります。

それから又、千年の風化を経て、まったく石はなくなり、立て札に、「ここに二千年昔、100メートル

四方の真四角な御影石があり、人々は神が作ったものか、仏が作ったものかと口々に話していました。」と書かれたものだけが存在する。誰も見物に来る人はいません。そればかりか、何をくだらない事を言っているんだ、そんな100メートル四方の立方体の石なんか世の中にあるはずがないじゃないか、昔の人はいいかげんで、「白髪三千丈」の表現と同じだよ、馬鹿馬鹿しい。と言つてまつたく信じないばかりか、馬鹿にします。

これが、正法時代、像法時代、末法時代の仏法衰退の認識の流れなのであります。つまり正法時代、像法時代までは釈尊を主人公として仏教が成り立っているのであります。しかし末法時代に入ると、釈尊の存在も、教えも、まつたく信ずる事が出来ない衆生がほとんどの時代になつてしまふのであります。形のあつた石が磨滅して粉々の微粉末になる。100メートル四方、50メートル四方の固まりがなくなつて、それを成立させていた成分の根本、微粉末はある。一滴一滴の水が集つて大海の水となる事と同じであります。

正法時代、像法時代、釈尊、諸仏、諸菩薩を中心

に仏教を認識して来た人々に、その時代の大きな石も、このサラサラ指の間からこぼれ落ちるこの微粉末が集つて固まつたものなんだ。釈尊や大日如来、阿弥陀如来、観音、弥勒を拜むことが信心ではなくて、釈尊や大日如来、阿弥陀如来……が信じ修行し、悟つて仏になつた法を同じように信じ修行する事が、衆生にとつて大事なんだ。釈尊の存在、教えを信じることが出来ない、仏から一番遠い末法の衆生だからこそ、一番根本の仏が根本とした法を信じ、修行する事によつて、仏と同じ様に必ず仏になる事が出来る。釈尊や大日如来、阿弥陀如来を拜んでいても仏にはなれないんだ。

このことを本源の教え、微粉末の石の根本の成分の教え、久遠元初本因妙の教えというのであります。釈尊中心の正法時代、像法時代から、法中心の末法時代の教えの切り換えを示す為にこの時代区分があるにもかかわらず、平安、鎌倉時代の宗祖開祖から時代を経るに従つて末法に入つても、特別天地がひっくり返るわけでもないし、権力者は以前と同じように力のある者が力を持つて世の中を治めて行く、どれもこれも昔と同じじゃないか、という考えで、

全ての宗教が末法という時代区分を無視して、何宗でも一緒、何宗でもかまわん、という元の木阿弥の姿になつて行つてしまつたのであります。

この中で、日蓮大聖人だけが、末法の区切りがなければ仏法は成立しないと主張するのであります。

それは、法華経の中で、釈尊が上行菩薩に仏滅後、末法の為に南無妙法蓮華経の法を付属するという、まさしく釈尊中心でなく、法を中心として成立する仏法本来の姿が説かれてゐるからであります。

この付属を受けた上行菩薩の再誕と、日蓮大聖人が自称する事とは、南無妙法蓮華経の付属の正統性を表現している鍵であつて、上行菩薩の振舞は、末法に付属をするという一点だけであります。

そこで日蓮大聖人は、この付属を受けて、この南無妙法蓮華経を実行するという振舞いは何かと法華経の中に探求した時に、正しく法華経の行者の振舞い、末法万年の折伏弘教の正本として、常不軽菩薩の存在にぶつかつたのであります。そして、

「今日蓮は去ぬる建長五年四月二十八日より、今弘安三年十二月にいたるまで二十八年が間、又他事なし。只妙法蓮華経の七字五字を日本国の一切衆生の

口に入れんとはげむ計りなり。此即ち母の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり。此又時の当たらずるにあらず。已に仏記の五五百歳に当たれり。天台傳教の御時は時いまだ来たらずりしかども、一分の機ある故に、少分流布せり。何に況や今は已に時いたりぬ。設ひ機なくして水火をなすともいかでか弘通せざらむ。只不軽のごとく大難に値うとも流布せんこと疑いなるべきに」諫曉八幡抄（全584P）と示され、①上行菩薩が付属し、末法に伝えたる南無妙法蓮華経を、②末法折伏正意の時代に、③常不軽菩薩の生き方をする事が、二十八年間、日蓮のやつて来た事だと、自分の人生のあり方を分析してゐるのであります。この①②③の三点が真実の血脈の必要十分条件であり源であり、成仏の根拠とも重なるものなのであります。

誰もが、地獄、餓鬼、畜生等の十界を持った凡夫であり、無謬の者など一人もない。仏も凡夫だといふ宗旨にもかかわらず、貫主になつた者は生き仏で、金口嫡々、一器の水を一器に写すが如くと、前の一器が造像読誦の貫主であろうが言い続ける愚無謬論。そんな事は日蓮大聖人の教えを貶めるだけの

事であります。

日達上人の所迄は正しく血脈は流れていたが、日
顕上人（本名阿部信雄）で血脈は断絶した。じゃあ
血脈は日顕上人の言う様に、日蓮大聖人の仏法が無
くなったという事なのか。どこかにダムの様に貯水
されているのか。前の貫主、前の貫主から流れてく
るものなのか、前の貫主が間違っている、流れて
くるものなのか。

今迄、教えられて来たものは、これほど低俗で子
供にも納得して貰えない様なことを大真面目で主張
し、現在も主張し、信じ嵌っている人々がいる。こ
んなものがどうして広宣流布出来るのだろうか。

キリスト教、カソリック教会は、ローマ法王の名
を持つて、百年余り前、ガリレオを宗教裁判によつ
て有罪にした事を訂正して、天動説を改め、地動説
を認めた。ローマ法王は生き神であると彼等は思っ
ている。キリスト教は原理主義であります。進化論
も、墮胎も、ホモセクシャルも認めません。天地創
造に始まって最後の審判で終る。有始有終の信仰で
あります。アメリカ人の信者さんに、神が天地の全
てのものを作つたと言ふならば、同性愛者の人も作つ

た事になるのではないかと聞くと、キリスト教では、
彼等は神が作つたもの以外のものと主張されてい
るとの事でありました。地動説に代表される様に、
神が天地をどの様に創造したのか、ローマ法王を生
き神として中心に鳩首凝議をしても、神がどの様に
天地を創つたのかということさえ聖書に書いてない
のでありますから、頓珍漢な面子だけのものになる
のは当り前の事なのであります。世界大戦の戦前戦
中における「天皇現人神」も、今となつては悲哀な
滑稽話、洗脳教育であつたことが良く分るのであり
ます。

生き神、生き仏は、結局滑稽な矛盾を産み、それ
を人々に強要するか、人々の心が離れて行くか、人々
の心を殺し、苦しめるだけで終つて、宗教の目的で
ある成仏と救いに繋がらないのであります。大石寺
の貫主が将来、百世の貫主になるのが二百世の貫主
になるのが、①②③の三点に叶う貫主こそが「日蓮
と同意」の、もしくはそうなるうと努力している法
華経の行者であり、真の貫主と言える貫主でありま
す。前の貫主から血脈を頂き、間違つていても曲つ
ていても否定しないで辻褄を合せて、①②③は論外

という貫主は、大石寺という組織の利権を守る経営者、政治家としては良いかも知れませんが、一切衆生成仏を目的にした法華経の行者とはいえないのであります。

今、大石寺に常不軽菩薩の生き方と心があるだろうか？ 創価学会にあるだろうか？ 限りなく浅井氏の絶対化をすすめる顕正会にあるだろうか？ 正信会にあるだろうか？ 忘れていたのではないだろうか？

日蓮大聖人と熱原法華講衆が相寄って唱えた南無妙法蓮華経の中味の生き方は、常不軽菩薩の24文字の経文であります。

南無妙法蓮華経の御題目さえ弘めれば、世の中が平和になり、大功徳を受け、成仏出来るといふ考えは間違いで、創価学会の壮大な現行実験によって、時代の徒花だったことが証明されました。

日頭上人も、「今の時代に日有上人・不軽菩薩などと古い。」と言下に吐き捨てる様に言いました。世界広布、東洋広布を声高に訴える方も、不軽菩薩などと言っていたら世界に通用しない。じゃあ頼道師は25年間何をやって来たのか。不軽菩薩の理を事

の上に実行して来たのか、甘い、軽いと否定されました。

私は25年間やって来て、本当に日蓮大聖人の久遠元初本因妙の南無妙法蓮華経の中味は、常不軽菩薩の24文字であり、この事を縁する人々に伝えて行く事が逆縁の折伏である。戒壇の本尊の中味もこれ、血脈の中味もこれ、熱原法華講衆の生き様も貫主の生き方、貫主が大衆に手本として伝えて行くのもこれ、成仏を遂げる条件もこれだ、これしかない、日蓮大聖人の生き方を通して、原点に立ち帰って思うのであります。

世界の諸宗教に欠けているもの。大石寺、創価学会、顕正会、日蓮正宗の歴史に欠けていたもの。日蓮大聖人の生き方の中に一番見出さなければならなかったもの、それが①②③だといふ事が分かったのであります。私は一般世間の人々、縁する人々、千人、万人の人々に伝える力量はありませんが、縁する人々に、私はあなた方を深く尊敬します。少しでもあなた方を軽んじたり、見下げたりしません。何故ならば、あなた方は、皆んな南無妙法蓮華経の信心修行をすれば、誰もが南無妙法蓮華経の仏になる事が出

身延日蓮宗も靈友会も立正佼正会も創価学会も大石寺も顕正会も、全て発音はなんみょうほうれんげきようであります。しかし創価学会は、その中味を病気が治りますように、御金がもうかりますように、悩みがなくなりますように、創価学会が発展し、池田先生が国主となりますように、南無妙法蓮華經であります。大石寺も右にならえ、靈友会は先祖故人の追善供養を熊手でかき集めるように、沢山すれば、自分が幸せになれるという南無妙法蓮華經であります。顕正会は、日蓮大聖人の究極の目的は国立戒壇であり、その実現の為の南無妙法蓮華經であります。身延日蓮宗は、釈尊の南無妙法蓮華經で、末法本因妙の根源の南無妙法蓮華經とは違います。

南無妙法蓮華經と言つても、その中味はまったく違つてあります。

①②③が中味でなければ、我々末法の衆生の成仏は無いのであります。ただ南無妙法蓮華經の題目が世界に拡大すれば、平和になり大功徳だと考える事は愚劣なことでありませう。

末法の衆生は、釈尊から妙法の種を植えられていない「本末有善」の衆生だということを言います。

逆から言えば、我々末法の衆生は、釈尊に南無妙法蓮華經の種を植えて貰う必要のない生命なのであります。もともと、開示悟入と常不輕菩薩の24文字の意味は共通したものであります。全ての生命に南無妙法蓮華經の生命が具つているものなのであります。具つている妙法の生命に氣付く者と氣付かない者がいるだけなのであります。だから釈尊を主人公とした植手は必要ないのであります。釈尊から見れば本已有善であります。上行付属の南無妙法蓮華經を常不輕菩薩の折伏行の縁によつて「心性の妙蓮が開く」のであります。

正しい法ならば世界中に広まつてあたり前だという人がいます。もつとすごい人は、正しいから広まつたんだという人でもあります。正しくなくても世界に広がつたものは沢山あります。

法華經「見宝塔品第十一」（開結415）に、六難九易が説かれ、その四番目に「少説此經難」が説かれています。

我が滅度の後に若し此の經を持ちて一人の為に

も説かん是れ則ち難しとす
千人、万人に病氣が治る為の南無妙法蓮華經だと

間違つて伝えるよりも、一生の内一人の爲だけにでも①②③を中味とした南無妙法蓮華經を説く事の方がむずかしく、正しいのであります。

日達上人書写の本尊は大丈夫なのか

初めから申し上げて来たように、金口嫡々の大石寺が主張する血脈は、大石寺の本来の血脈でありません。ですから、そのような謂れの血脈は、日達上人にも断絶し、流れていないのであります。もしそれを求めるとすれば、日目上人の所迄戻らなければいけないということになります。しかし、現実の日目上人に師弟相寄つて仏道を求めるということは、七百年の隔りを持つて不可能であります。

私自身も大石寺から離れ、今日迄25年間、御信者に御下附されていた日達上人書写を原版とする御形木御本尊を、信仰の対境として本堂に安置し拝してあります。

その理由は、日達上人迄は正しく血脈が流れていますが、日頭上人（本名阿部信雄）で血脈は断絶した。という理由ではありません。

日蓮正宗の貫主相承の歴史がズタズタだということ

とは、それが凡夫の性であり、凡夫成道の宗旨であることの証明であると思ひます。天皇の継承に沢山の疑問があり乍、二千六百年万世一系は日本だけだと尊んでいるのと大差ないのであります。

末法のどうしようもない大石の様な元品の無明を持つた荒凡夫でも成仏出来る教えは、日蓮大聖人の教えしかないのだということを説き乍、貫主だけは別格だというわけにはいかなないのであります。

日頭上人は、釈迦在世、正法時代、像法時代、迹門の釈尊を主人公と考ふる法門の考え方と同次元に立つて、自分が仏の血脈を継ぐ者であり、仏であり、自分が衆生の成仏、不成仏を裁き決するのであると考ふる、爾前迹門の謗法者でありますから、これは物証的相承があつたとしても、信仰者として論外の失格者であります。

日達上人も貫主本仏の思想の中で産れた貫主であります。

常在寺住職・宗務総監時代の弟子の方に、「日達上人が猊下として本山へ上るといふ話があつた時に、本山へ行つたら、仏様になるんだと先輩から言われ、へえー、人間がどうして仏様になつちや

うんだらうと子供心に思った。」
という想い出話を聞かされたことがあり、それが
大石寺内の常識的な思想だったんだなあと感じまし
た。

それは、宗門の歴史にどれほどの矛盾があつても
平気でそう考え続けて来たということであります。

私達も小僧として大石寺大坊で生活している時、
小僧は貫主に対して片膝で跪いて合掌礼し、教師は
立ち姿で合掌礼するということを常識として教えら
れた。

町中の一般道路でも、日達上人が乗っている車だ
と分ると、道端に跪いて世間の眼が何を考えようが、
合掌礼をした。

今、振り返つて考えると、何と愚かな、日蓮大聖
人の教えから外れたことをしていたのかと思う。

東南アジアの国々では、日本の「おはよう」には
じまる一般の挨拶にはじまって、ほとんどの挨拶
「ありがとう」の類いまで

「ナマステ（南無三宝）」

だということを教えられたことがある。

小乗経中心の国々で、イスラム教が台頭して来て

いる国情にもかかわらず、御互いが向き合い、御互
いが合掌して「ナマステ」と頭を下げる。二人の間
に仏、法、僧に帰依する法が中心としてあるという
ことであり、素晴らしい事だと思う。

貫主だけに合掌礼をする姿は、貫主だけを仏と考
えているということであり、法はどこにあるのか？
貫主と法は一体という意味になるのか。

貫主に差し出す御供養ののし袋の向つて右方には
「奉」の文字を入れ、「奉る御供養」としなければい
けないと言われたが、ある先輩が奉御供養を出し乍、
「御本尊様に供える御供養はただ御供養とだけ書い
て、貫主には奉御供養。何か変だよ、逆じゃない。」
と言つていた。愚かな習慣が大事な法門を崩して行
く。

常不軽菩薩の精神を根本にするならば、御互いの
仏性を尊敬し合う、認め合う。人格・人権よりも尊
い仏格・仏権を認め合う挨拶、礼儀が存在してしか
るべきではないかと思う。

小乗経の国の挨拶よりも劣っているのであります。

大石寺大坊の朝に流れる軍歌と同様に、貫主一人
だけに向けられる合掌礼は、日蓮大聖人の法門に外

れるものであり、治療しなければならぬポイントだと思う。

日達上人は、自分自身が創価学会台頭期の理解者として、宗門に受け入れた人物であります。そして、創価学会繁栄の時流を背景に貫主となり、協力関係を維持し、時に創価学会への批判を自ら圧さえつつ正本堂迄の流れを築いて来たのであります。しかし、正本堂建築に当っては、貫主無謬論では正本堂国立戒壇論争も納める事さえ出来ぬ綻びに気付きます。

昭和五十二年の創価学会独立計画、池田大作本仏論が世に露れる状態になって、日達上人は創価学会主導でやって来た路線の間違いに気付きます。宗門と創価学会は主従関係にあると思つていたものが、同等を越え、逆の主従関係となり、日達上人がののしられ、軽んじられ、おどされる状態になった時、貫主本仏観、貫主無謬論の破綻を自覚しなければいけなくなつたのであります。

阿部信雄師に相承する事も出来ず亡くなられ、私達に血脈とは何か、相承とは何か、折伏、広宣流布とは何か、という事を深く考えさせる修行の課題を置き土産として亡くなられたのであります。

貫主は仏ではない。そのことを身を持つて示してくれた貫主は、近年日達上人しかいないのであります。①②③にはほど遠かつたかもしれないのであります。日達上人が法門をリセットするボタンを押してくれた。①②③に気付き、血脈、相承の源は何かを考えさせてくれる機縁を与えてくれた。

だから私は、日達上人書写の御形木御本尊様を本堂に御安置し、成仏を求める信心修行をしているのであります。

故に、私は65世日淳上人から日達上人が相承を受けたから正統な貫主として信ずるという考えは持たないのであります。何故ならば、その前には60世日開上人も、17世日精上人もいるからであります。言い出したら切りがないから、正しいということにしておこう。日達上人迄は正しく血脈が流れていたというにしておこう。日顕さんに相承が物証としてなかった。だから断絶した。これでは一切衆生成仏の法の正統を示す説明にはならない。

後世の凡夫のゴタゴタで源の日蓮大聖人の本因妙の法が無くなると主張する日顕師の方が、自分を主とし法を従とする狂人なのであります。

